

<実践報告>

教職課程における「総合的な学習の時間」の指導の在り方に関する研究

黒木 義成[※]

A study on how to teach “Comprehensive Study Time” in the teaching profession

Yoshinari KUROKI[※]

要 約

「総合的な学習の時間」は、平成10（1998）年の教育課程審議会答申を受けて、平成12（2000）年からの段階的な導入を経て、平成14（2002）年の学習指導要領の全面実施により導入された。平成15（2003）年に学習指導要領のねらいの一層の実現の観点から学習指導要領の一部が改正され、平成20（2008）年、そして平成29（2017）年の改訂に至っている。学習指導要領に明記されて以降、「総合的な学習の時間」の実践については、様々な場面で議論され、実践上の成果や課題がまとめられてきた。特に、平成29年3月の新学習指導要領では、全ての教科・領域での学習に関して、育成を目指す「資質・能力」を目標に掲げ、学習指導の充実を図っている。このような中、大学教育における教職課程の「総合的な学習の時間」の指導方法についても、どのように行えば、より効果的な指導につなげることが可能となるかが課題となっている。

そこで、本稿では、「総合的な学習の時間」の指導方法の在り方について、これまで実施した内容と活動例を示しながら、今後の授業改善に生かすものである。

キーワード：「総合的な学習の時間」、探究的な学習、横断的・総合的な活動

1 はじめに

「総合的な学習の時間は、平成10（1998）年に教育課程審議会の答申を受けて、2000（平成12）年の段階的な導入を経て、2002（平成14）年の学習指導要領の全面実施により導入された教育課程の制度である。」¹⁾

そして2003（平成15）年に学習指導要領を一部改正し²⁾、2008（平成20）年の改訂³⁾、2017（平成29）年の改訂が行われてきた。特に、平成29年の改訂では、2008（平成20）年改訂の趣旨を引き継ぎながら、児童・生徒の資質や能力の育成をより明確にしたものとなっている。「総合的な学習の時間」でも、資質や能力の育成を視点において、「課題設定」や「情

報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の探究過程を重視した学習を展開している。

教職課程の中で「総合的な学習の時間」の指導を行う際、平成10年度改訂から平成29年度改訂までの背景や改訂内容を理解させ、どのような指導を工夫改善していけばよいかを考えることが重要である。

本稿では、教職課程における具体的な指導の内容及びグループ別課題追究の具体的な報告内容をまとめることで、今後の授業改善の在り方について考えるものである。

2 総合的な学習の時間の改訂のポイント

改訂のポイントを3点に絞りまとめてみる。

[※]人文学部国際コミュニケーション学科 (Faculty of Humanities, Department of International Communication)

(1) 探究的な学習としての充実

これまで総合的な学習の時間では、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習を行うことを行ってきた。今回の改訂でもこれに加えて「探究的な学習」となることを明記している⁴⁾。

(2) 学校段階間の連携

総合的な学習の時間の課題としてあげられたのが「学校間・学校段階間の格差」や取組の重複である。これらを解決するために、総合的な学習の時間において育てたい力の視点を例示で示した⁵⁾。

学校段階間の学習活動としては、これまでしめしてきた「国際理解、情報、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題」に加え、今回中学校では、職業や自己の将来に関する学習活動などを例示として加えている。

(3) 体験活動と言語活動の充実

改訂された「総合的な学習の時間」では、これまで同様、体験活動を行うことを重視しながら積極的に学習活動に取り入れることとなった。自然体験活動や職場体験活動、就業体験や奉仕体験などである。しかし、これまで体験に終始してしまうこともあり、今回の改訂では、田村は、「体験活動を行うことによって一層充実した学習活動が求められている」と記している⁶⁾。体験活動と言語活動の充実を図ることが今改訂でのポイントとなる。

3 実践事例①—授業計画—

大学教育の教職課程の「総合的な学習の時間の指導」においては、改訂の趣旨に則り、授業計画を立て、途中、学生自身にグループ単位で課題追究を行い、情報収集から分析、まとめ、発表を経験させることで教壇実践を行う際の指導者としての意識の高揚を図っていきたいと考え、以下のような授業計画を立てた。

(1) 授業目標及びテーマ

教職課程における「総合的な学習の時間」を指導していくためには、「学生にどのようなテーマ」で、「どのような手順で追究活動を行っていけばよいのか」について、理解させる必要があると考える。その上で、「総合的な学習の時間」で育成を目指す資質・能力について、追究活動を直接体験させることで理解させ、より意識の高い指導を意識することができるものとする。

(2) 授業概要

「総合的な学習の時間」の意義や創設の背景、教育課程での役割を明確にする。そして、これから「総合的な学習の時間」を通して、どのような資質・能力を育成すべきなのかを理解する。また全体計画や単元構想計画の理解を図り、自分たちで「総合的な学習の時間」の課題設定⁷⁾を行い、同時に指導者として指導案の作成を試みる。

(3) 指導計画

大学の教職課程において、「総合的な学習の時間」に関して初めて受講する学生は、これまで小学校、中学校、高等学校の授業の中で、「総合的な学習の時間」について、受講する立場として、いろいろな経験を持ち、様々な活動を行ってきている。

しかし、指導者として教壇に立ち、「総合的な学習の時間」を指導する立場から、指導計画の作成においては、コアカリキュラム⁸⁾をもとに以下のような授業計画を立てた。

表 1 授業計画

回	内 容
第1回	オリエンテーション講義の概要と視点
第2回	「総合的な学習の時間の時間」の創設の背景と実践の現状把握
第3回	「総合的な学習の時間」の学習指導要領における目標と位置づけ

回	内 容
第4回	「総合的な学習の時間」の各学校において定める目標および内容
第5回	「総合的な学習の時間」の年間指導計画作成の意義
第6回	「総合的な学習の時間」と各教科及び他の領域との関連性
第7回	「総合的な学習の時間」で育成を目指す資質・能力
第8回	「総合的な学習の時間」の単元計画作成の意義
第9回	「総合的な学習の時間」の具体的なテーマ設定 (調査方法, 調査①) : 探究的な学習の指導
第10回	「総合的な学習の時間」の学習評価の在り方 (資料収集, 分析, 調査②)
第11回	「総合的な学習の時間」の指導案作成①生徒の関心や疑問の活用 (調査方法, 調査③)
第12回	「総合的な学習の時間」の指導案作成②意図した学習を効果的に生み出すために (調査方法, 調査④)
第13回	指導案の検討 調査報告会①
第14回	作成の振り返り 調査報告会②
第15回	期末試験・講義のまとめ等

【第1回】

オリエンテーション講義の概要と視点

授業の進め方を説明し、「総合的な学習の時間」の概要を理解させるようにする。

アンケート調査を実施し、「総合的な学習の時間」に対するこれまでの学習意識を調査し、実態を掴む。

【第2回】

「総合的な学習の時間の時間」の創設の背景と実践の現状把握

平成10年度に教育課程に位置付けられた「総合的な学習の時間」の教育課程上の課題や教職としての意義について理解する。また、これまでの実践例を校種別に紹介しながら、系統的な指導の大切さについて理解させるようにする。

【第3回】

「総合的な学習の時間」の学習指導要領における目標と位置づけ

これまで3回の改訂された「総合的な学習の時間」の目標の変遷について説明を行い、改訂の際、学校教育がどのような状況下にあったのかを理解させる。そして、平成29年3月の改訂の際に強調された、生徒に身に付けさせるべき「資質・能力」の獲得にどのようなつながっていったかを把握させる。

【第4回】

「総合的な学習の時間」の各学校において定める目標および内容

「総合的な学習の時間」の目標や内容については、各学校で実態に応じて年間指導計画を作成していることを説明しながら、各学校の実践においては、どのような特色があるか、事例を交えて紹介し、理解させる。

【第5回】

「総合的な学習の時間」の年間指導計画作成の意義

「総合的な学習の時間」の年間学習指導計画について、各学校で作成することの意義を理解させ、具体的な年間学習指導計画作成の事例について紹介し、学習指導要領との関連の中で各学校が作成していることの意味を深める。

【第6回】

「総合的な学習の時間」と各教科及び他の領域との関連性

各学校で作成されている「総合的な学習の時間」の年間学習指導計画等について、教科・横断的な指導として、各教科と特別活動とどのような関係があるのかについて事例を交えて紹介し、理解させる。

【第7回】

「総合的な学習の時間」で育成を目指す資質・能力

平成29年3月に改訂された新学習指導要領の中で、「総合的な学習の時間」で育成をめざす資質や能力とは何か、その背景とこれからの指導の方向性について理解させる。また、目標や内容との関連について説明を行い、理解を深める。

【第8回】

「総合的な学習の時間」の単元計画作成の意義

「総合的な学習の時間」の年間学習指導計画を立てる際、単元計画の作成の意義について説明を行い、計画的な課題追究活動であることを理解させる。

【第9回】

「総合的な学習の時間」の具体的なテーマ設定（調査方法、調査①）：探究的な学習の指導

「総合的な学習の時間」において、生徒が課題を追究していくための、テーマ設定について、生徒の立場になって考えさせ、後日実施する課題追究活動とまとめにつなげていく。

同時にテーマに基づいて、具体的な調査方法について考え、学内で可能な資料収集を行い、追究活動を行う。

【第10回】

「総合的な学習の時間」の学習評価の在り方（資料収集、分析、調査②）

「総合的な学習の時間」の学習評価について、説明を行い、他教科との違いや学習評価と育成をめざす資質・能力との関連について理解させる。

その後、グループ別の追究活動を行い、資料分析等始める。

【第11回】

「総合的な学習の時間」の指導案作成
(1) 生徒の関心や疑問の活用
(調査方法、調査③)

設定したテーマをもとに、指導者として指導案の作成を体験させ、指導案と生徒の設定するテーマとの関連を理解させる。

その際、生徒の関心や疑問の活用を指導案にどのように反映させるかについて学べるようにする。資料分析を継続して取り組む。

【第12回】

「総合的な学習の時間」の指導案作成
(2) 意図した学習を効果的に生み出すために
(調査方法、調査④)

指導案作成において、教師の教えたことを、生徒の学びにつなげるための指導案を作成する方法について意見交換を行いながら主体的に指導案作成に取り組めるようにする。

課題のまとめ及び発表の準備を行う。

【第13回】

指導案作成の検討、調査報告会①

出来上がった指導案をグループ内での検討を行う。その際、現在行っている調査活動を参考にしながらまとめていく。他者の考えを聴くことでそれまでの指導案よりもより練ら

れた指導案になっていく。

また、これまで課題別に行ってきた追究課題について報告会を実施する。

【第14回】

作成の振り返り， 報告書まとめ②

指導案作成の振り返りを行い， 指導案作成の成果と課題をまとめる。

前回到引き続き， 課題報告会を実施する。

【第15回】

期末試験と講義のまとめ

授業の総括を行い， 授業の理解度や調査研究の際の具体的なまとめ方等について試験を行う。また， 授業全体の総括を行う。

今後の履修について確認する。

4 実践事例①—調査研究—

授業では， 学生が生徒の立場に立って， グループ毎に追究課題を設定し， 課題を解決するために必要な資料収集等について話し合い， 調査研究活動を行った。グループは3名～5名で編成し， 具体的な計画を立て授業中と授業外での時間を活用した実践として行った。ここでは， 2つのグループの課題について紹介する。

<グループA>

テーマ

「沖縄における情報化によるモラル低下」

1 テーマ設定理由

グループAは，「情報」についてのテーマを設定し， 沖縄との関連で課題追究活動を行った。テーマ設定理由の中で沖縄は，「東南アジアとの様々な交流を行う上で， 地理的にも重要な位置にある。また沖縄は， 観光立県として， 多くの外国の人々が来県し， 経済の活性化を考えている。しかし， 急速な国際化の進展の中で沖縄の情報化の現状が追い付いていないのではないかと考え， 本テーマの

設定を行った。」と説明があった(図1)。

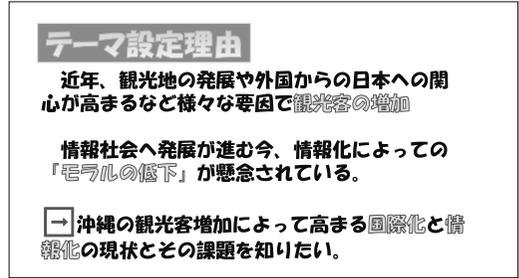


図1

2 現状と考えられる未来の沖縄

グループAでは， 課題追究の視点として， 国際化と情報化における沖縄の現状と将来像について， まとめることとした。現状としては， 観光の視点で国際化が進んでおり， 公衆施設等において， Free Wi-Fiや外国人向けの観光掲示板の整備が進んでいることが把握できた。

外国人の沖縄観光の将来についても現在より便利な状況となっているものとして認識されていることがわかる(図2, 3)。

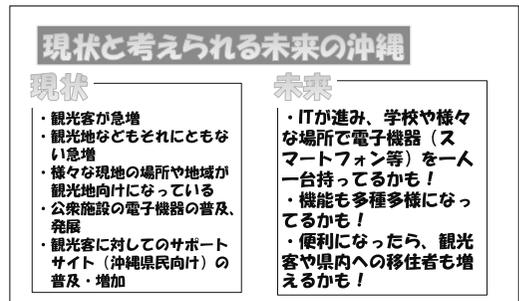


図2



図3

3 国際化・情報化の発展の現状

今後、沖縄で国際化がこのまま進んでいった際、グループの中で次のようなことが懸念材料として挙げられた。

- 観光客向けの施設の増加により、地元沖縄の人々が住みにくくなるのではないか。
 - 国際化が進むことで多くの多様な人々が沖縄に住むことから、沖縄独自の慣習がなくなるのではないか。
 - 国際化が進むことにより、交通網や施設が整備され、今よりも都市化するのではないか。
 - 世界の多くの国々からの移民が増えるのではないか。
- このように現在の状況からマイナス的な考えが出されている反面、次のようなプラス面での意見も出された。
- 多種多様な人々が沖縄に入ることにより、物事を多面的にとらえる社会となり得るのではないか（図4～図6）。

これらは、観光立県であるがための懸念事項であると思われる。

大学内での事前学習を行った後、グループAでは、那覇空港や市内の大型ショッピングセンター等において観光で来島している外国人や地元沖縄の人々に対してインタビューを

国際化の発展の現状

- ・観光客向けの施設が増加するため、地元民が住みにくい沖縄になる。
- ・沖縄独特の慣習がなくなる。
- ・交通機関や施設等、全体的に都市化する。
- ・世界中から移住民が増加する。
- ・国際化の発展により、多種多様な人材が集結し物事を多面的に捉えることができる。

図4

情報化の発展の現状

- ・IT機器の進歩により、外国語の必要が無くなる。（母国語のみでいい）
- ・モラルが低下し続けることにより、現状よりも悪化し便利にはなるが良くない。
- ・様々な情報が飛び交うため、正しいかどうか曖昧な状態になる。
- ・気軽に声を掛けやすくなる。

図5

考えられる課題

**情報化が進むにつれて
【モラルの低下】がみられる！**

図6

実施することとした。

インタビュー活動は、数年前までは、沖縄を訪れる外国人観光客数が30万人であったのが、平成30年度には、約300万人を超えるようになっていたことが大きな理由となっている（図7）。

ACTION→インタビュー調査

・インタビュー内容設定理由

①沖縄県への外国人観光客増加



図7

沖縄を観光として訪れ、そこでどのようなことを感じたのかを地元の人との比較をすることで、今後の外国人の沖縄観光の方向性について知ることができるの考えからであった。

図8は、沖縄県内でのスマートフォンの2012年～2019年までの普及状況である。図では、年々スマートフォンの普及が進み、人とコミュニケーションを取らないで様々な場面

②スマートフォンの普及

→電子機器の発展に伴い、コミュニケーション頻度減少

スマートフォンなどの電子機器が普及したため、面と向かってコミュニケーションを取らずに済む時代に！

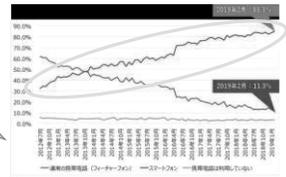


図8

で用事を済ませることができるような場面が増えてきていることが把握できる。

図9, 10, 11は, インタビューを行った外国人観光客及び地元の人の結果を示している。結果として, 外国人観光客も地元民も目的地を探す際, スマートフォンや翻訳機を活用している人が多いことが把握できた。しかし, 外国人観光客は, 母国語が様々なため, 沖縄で使える端末が対応できていない場合もあることがわかった。「改めて, 観光客向けのWi-Fi環境の整備等への対応が必要であることが把握できた。」との報告が行われた。

インタビュー対象

IN 国際通り

①外国人観光客(10人)

- ・旅行中に地元の人に道を尋ねたりしましたか?

YES→地元の人はどうして教えてくれましたか?
NO→どのようにして自分で調べましたか?

②地元民(10人)

- ・外国人に道を尋ねられたりしたことがありますか?
- ・どのようにして答えましたか?
- ・困ったことはありましたか?
- ・お店で電子機器を使っていますか?それとも導入予定ですか?

図 9

インタビュー結果

①外国人観光客(10人)

- ・旅行中に地元の人に道を尋ねたりしましたか?

YES(6人)	NO(4人)
地元の人はどうして教えてくれましたか? ・スマートフォン (3人) ・翻訳機 (2人) ・ジェスチャー (1人)	どのようにして自分で調べましたか? ・スマートフォン (3人) ・マップ (1人)

図 10

インタビュー調査のまとめ

- ・実際人とコミュニケーションを取らなくても, 調べることができる手段がある
- ・尋ねたとしても, 電子機器の使用がほとんどである
- ・母国語以外でのコミュニケーションの希薄化も見られ, また電子機器の限界も感じる
- ・お店でも外国人観光客に対応できるように電子機器の導入などもある

情報化が進むにつれて
【モラルの低下】がみられる!

図 11

調査研究を通して, 「国際化と情報化は止められないため, 二つが進んでいく中でどうモラルが希薄化しないかという取組みを考え, 実施していく必要がある」と報告された。多くの外国人観光客に来県してもらい, 地元民との交流を情報機器等も活用して図っていくことが今後大切であることも併せて報告された (図12~14)。

調査研究を通して(まとめ)

- ・国際化と情報化は止められないため, 二つが進んでいく中でどうモラルが希薄化しないかという取組みを考え, 実施していく必要がある!

ウェルカムんちゅ

観光客にとって, 出会う県民一人一人が沖縄の印象になるため, コミュニケーションを取れるようにするための手助け。



図 12

ウェルカムんちゅ



【「ウェルカムんちゅ」動画】

【みんなの体験談】



【多言語コンタクトセンター】

図 13

ウェルカムんちゅ

- ・「ウェルカムんちゅ」を通して, 外国人観光客が増えてきて, また移住者も多い沖縄県の現状がある中(国際化), スマートフォンなどの電子機器が普及・発展(情報化)しているため, 沖縄県民がモラルを希薄化させないために, 外国人とのコミュニケーションを取ることに慣れ, 外国人観光客が沖縄を好きになり, 大切にし, また来たいと思うことができるでしょう。

図 14

グループのまとめとして、調査研究（インタビュー活動）を終えて、沖縄県の国際化と情報化が進むと「モラルの低下」にもつながっていることを実感したようである。今後、「ウェルカムんちゅ」の取組みを積極的に進めていくためには、モラルの低下にならないような取組みが必要であると結論づけられた（図15）。

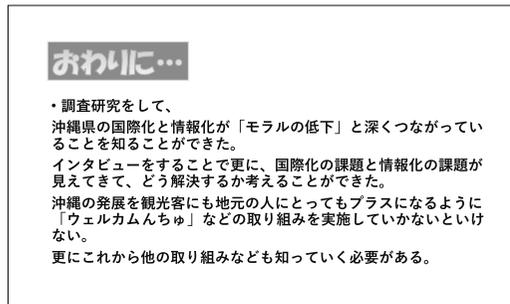


図 15

4 伝統文化の継承

<グループB>

テーマ1

「わったーしまやどういうところ？」

グループBでは、伝統文化に焦点をあて、「エイサー」と「ウチナーグチ」の2つについて追究課題とし、資料収集から資料分析、まとめ、報告までを行った。

グループBのテーマ設定の動機として、「沖縄では、エイサーはじめ琉球舞踊、陶器づくり、島くとうば等、伝統的に現在まで受け継がれてきているものが多々見られる。しかし、近年、若い世代への後継者不足が課題として出てきている」ことをテーマとして、追究していくことにした。

そして、本課題を追究していくことで、沖縄の伝統文化を今後も守っていくにはどうしたらよいのかを共通理解し、グループの追究課題として伝統文化を取り上げまとめるに至った（図16）。



図 16

<島くとうばーウチナーグチ>

グループBdeha, 一つ目に沖縄方言について、調査研究していくこととした。沖縄方言は、「島くとうば」⁹⁾とも呼ばれ、島内では、「ウチナーグチ」として親しまれている言葉である。グループによれば、「近年、「ウチナーグチ」が見直され、様々な場面で「ウチナーグチ」を使う場面が増えてきている。しかし、高齢化の進行とともに、方言を話せる人が減り、このままでは将来、方言を「話せない、聞けない」状況が出てくるのではないかと懸念が出始めている。」また「このような状況になった背景としては、核家族化が増え、方言に詳しい祖父母との交流が減ってきたことや日常生活の中で方言を使う場面がほとんどなく、方言を話さなくても生活に影響もないこと、また県外の人々との交流も増え、標準語が主となり、方言を話す人が減っていることなどが要因として挙げられる。」（図17、図18）と説明している。

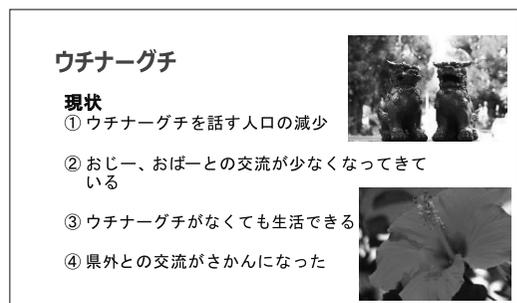


図 17

ウチナーグチが話せない理由… (年代別特徴)



20代 ・ 似非ウチナーグチになっているから

30代 ・ 習っていない
 ・ おじーおばーが氣を使い、若者にウチナーグチを使わない
 ・ 若い世代が本土に行き、使わなくなってしまった。

40代 ・ 身近に使う人がいない (使う機会がない)
 ・ 県外との交流などで、若者言葉が増えた
 ・ 県外の情報が入ってきて、東京など、日本に合わせるという、意識がある。

50代以上 ・ 親が方言を話してはいけないと習っていたので、子にもウチナーグチを話さず、聞き取るだけになってしまった。
 ・ 日頃から使わない

図 18

図19は、グループのまとめた「年代別の方言の理解度」について聞き取り調査したものである。

調査結果として、「年代が高くなるにつれて、単語、聴き取り、会話で方言を理解できている割合が高くなっている。単語としての理解は最も高いが会話になると若い年代ほどできない割合が高くなっている。そのため、若い世代への方言の継承が課題となっていることが把握できた。」と説明しており、課題を明確にしている。

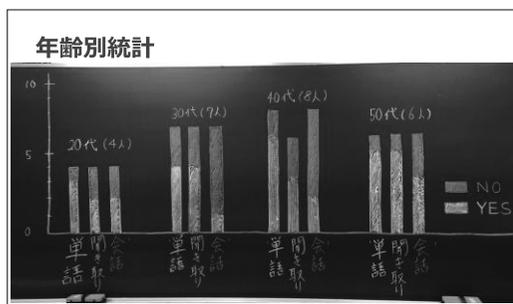


図 19

しかし、沖縄県で方言を使う人が少なくなってきた要因は、話せる人の減少だけでなく、歴史的にみると、「方言札」による言葉を制限したことも大きな要因として挙げられ

る。図20は、明治末から第二次大戦後まで沖縄県内の様々な学校等で使用された「方言札」である。

当時は、学校教育において、方言で会話することを禁じており、厳しく罰せられたとの記述も見られる¹⁰⁾。このような中で方言を使う人が減少し、先の様々な事が要因となって、



図 20

ウチナーグチを使えない、聞けない人が増えてきたと考えられる。

そこで、今後の対応として報告されたのが以下の5点である。

改善策・まとめ



- ① 小・中の教科に「方言」をつくる。
- ② 校歌をウチナーグチにする。
- ③ 全校生徒で、方言の童話に取り組む。
- ④ 大学生向けの無料方言セミナーを、オジーオバーが行う。
- ⑤ 「島くとうばかたやびら大会」をたくさん開く。

図 21

- ① 小・中の授業の中に方言を学ぶ教科を設定する。
- ② 学校の校歌をウチナーグチにしてみる。
- ③ 学校全体で方言の童話に取り組む
- ④ 大学生向けに無料の方言セミナーをオジーやオバーを招聘して実施する。
- ⑤ 島くとうばかたやびら大会を開く

テーマ2

「エイサーの現状 —伝統エイサーに着目して—

次に、グループBは、伝統文化である「エイサー」¹¹⁾に着目してその課題を掘り起こし、継承していくための具体的な方法を考えることとした。

1、エイサーの問題について・・・

- ・道じゅねーを午前3時までやっていて「うるさい」と苦情が入っている。
- ・エイサー練習を夜遅くまでしていて苦情が来る。
- ・地域の青年会が休止してしまい、旧盆が静かに感じる。

図 22

まずエイサーの現状として、課題が報告された。

エイサーは、お盆の頃、集落の中を回りながら踊るため、次のような問題が起きているとのことであった¹²⁾。

- ① 道ジュネーを午前3時までやっていて「うるさい」との苦情がある。
- ② エイサー練習を夜遅くまで行ってしまい、保護者より苦情が出ている。
- ③ 地域の青年会が休止してしまい、旧盆が静かに感じる。

2、エイサーの衰退と復活

- ・県全体的に青年会のメンバーが減ってきているため活動を休止する青年会も増えている。
- ・一方、地域の支援を借りながら見事に復活を遂げた青年会もあります。

図 23

エイサーは、沖縄県内の各地域で様々に取り組まれている。しかし、近年、青年会へ参加する若者が減少し、活動できなくなってい

る団体もあるという。

しかし、現在でも中部地区を中心としながら、地域の支援を受けながら青年会が主体となってエイサーを継承し、活動している状況も見受けられる。

また沖縄県内の小・中・高校では、毎年、運動会や体育祭等でエイサーを種目として保護者や地域に披露する場なども設けている。

エイサーの魅力

- ・道じゅねーや練習で太鼓の音を聞くとわくわくする。
- ・かっこいい。
- ・地域のために頑張れる。



など

図 24

グループからは、エイサーの魅力について、地元民にも尋ねている。

- 「道じゅねー」やエイサーの練習でパーラunker（エイサー太鼓）を聞くと、気持ちワクワクしてくる。
- 単純にかっこいい。
- 若い人たちのエイサーを踊っている姿を見ると、地域のために頑張ろうと思う気持ちが強くなる。

県外の人たちはエイサーをどう見る？

- ・かっこいいや沖縄では盛んにおこなわれていると感じた。
- ・エイサーはエイサーと見ていたが青年会によって踊りが違うことにすごいと思った。
- ・通行止めにしてエイサーをやっているんだと感じた

図 25

グループからは、県外の人々は、エイサーをどのように見ているのか、以下のように報告された。

- エイサーは踊りが、かっこいいし、各地域で盛んに行われていると思う。

- エイサーはこれまで踊り方は一つと思っていたが、実際は各地域の青年会が中心に様々な踊り方があることがわかった。
- エイサーを地域で踊る時には、通行止めをして踊ることが驚きでした。
- エイサーが念仏踊りだと初めて知った。

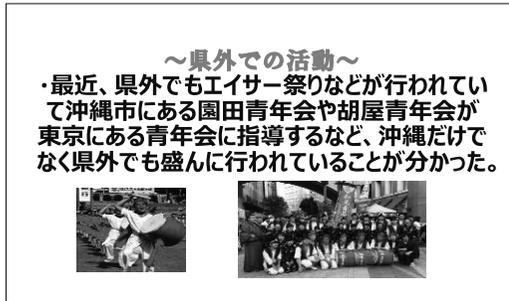


図 26

エイサーは、沖縄県内だけでなく、県外でも盛んに踊られていることもわかった。(図 27) 中部の沖縄市にある園田青年会や胡屋青年会の人たちが東京にある青年会に指導していることも報告された。

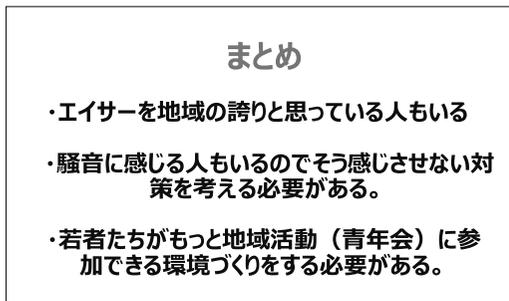


図 27

エイサーは、沖縄県の伝統文化として広く人々に浸透しており、現在では、その踊り方も現代風に工夫されてきているものもある。今回のまとめとして、グループBは、以下のようにまとめを行った。

- 沖縄県内では、エイサーに誇りをもって踊っている人たちが多く、伝統を絶やさないという気概を持っている。
- 課題として、エイサーの太鼓や人々の掛け声などの音を騒音とを感じる人もいるため、その対策を今後も考えていくことが大切で

ある。

- エイサーに興味・関心を持っている人は多いが、実際に踊る人は多いとは言えない状況にある。これから地域で、エイサーを踊る人をどのように増やしていくかが重要であると考える。

5 成果と今後の課題

今回は、「総合的な学習の時間」の指導の在り方について、理論的な指導の在り方と学生に生徒として、自ら課題を設定し、資料収集、まとめ、報告の順で追究活動を行った。理論的な面では、平成29年に告示された内容を中心に学校で育成を目指す資質・能力を中心に「総合的な学習の時間」での具体的な指導の在り方について講義を行い、同時に学生に中学生になってもらい、課題の追究活動を実施した。

一連の授業と学生のグループ活動を通して、次のような成果と課題を得ることができた。

<成果>

- 1 学生に課題追究活動を体験させたことで、課題設定から資料収集、分析、考察、まとめ、発表といった一連の活動を子どもの立場として実感することができた。
- 2 実際の体験活動を行ったことで、「総合的な学習の時間」の教育課程における意味づけを理解することができた。
- 3 指導者になった時、どこに注意しながら指導を行えばよいかを明確にすることができた。

<課題>

- 1 中学校、高等学校の教育課程の中で実際の課題追究活動を行う際の時間の確保の工夫が必要となる。
- 2 学級担任として、「総合的な学習の時間」の指導方法について、意識を更に高めていく必要がある。

最後に今回の調査研究活動を通して、「総合的な学習の時間」が教育課程に位置付けられた背景や目標を基に、生徒にどのような資質や能力を身に付けさせる必要があるのか、また調査研究を行った経験がどのように生かされたかについてまとめを行った際の学生の感想を以下の通り示すこととする。

<学生A>

「総合的な学習の時間」は、ある課題に対して答えや成果を見つけるのではなく、最も適切な解決方法を自分たちで調査・研究を行う時間であることが把握できた。またそのためには、小学校、中学校、高等学校で教科横断的で総合的な学びを行い、自分の資質・能力を育成していくことが必要だと考える。今回、実際、外に出て沖縄県の国際化・情報化に視点を置き、一連の課題解決のために活動を行ったことは、実社会や実生活の中から課題を見だし、自分たちで課題を立て、情報収集を行い、結果を整理し、分析、考察、まとめを行った。そこで一番感じたことは、仲間と協力し、様々な物事に対して興味を持つことが大事だということであった。生徒がどんなに積極的に社会に参画しようと思っても、何かに対して興味・関心が無ければ、大人たちに認めてもらいたいというスタートラインに立つことさえできないと思う。私自身が今回のグループ活動に参加して、同じ課題をもったメンバーがいたからこそ、沖縄の国際化・情報化について興味を持ってたわけであり、個人ワークであれば、そのようなこともなく、知的努力を行っても探究するほどの物事に出会うことはなかったかと思う。沖縄の国際化・情報化について、調査研究を行っていく上で、実際に答えや正解を出すということの難しさや不可能に近いものを実感することができた。それと同時に課題を解決することの社会的必要性和課題に取り組むことの社会的価値についてインタビューを通して、一番に学んだ。課題に取り組むことにより、世の中の様々なもの・こと・ひとに働きかけ

て、反応を得ることにより「自分に自信をもつ」ということを学ぶことができた。今回、自分自身が中学生の目線で調査研究を行った。そこで感じたのは、生徒へより適切に学んでもらうためには、教師の事前準備が大事であるということである。将来、中学校の教壇に立ち、「総合的な学習の時間」を指導するような場面になったら、今回の調査研究を思い出しながら実践してみたいと今からワクワクしている。

<学生B>

生徒が自ら課題の解決に必要な知識及び技能を身につける「探究力」、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析・まとめ・表現をする「プランニング・情報処理力」、そして探して、求める学習を主体的・協働的に取り組む、そして積極的に社会に参画できる「自主性、協力性」を身に付けることが、「総合的な学習の時間」において生徒に身に付けさせたい資質・能力である。まず子どもたちが自分の意見やアイデアなど発想を自由に産み出し、そして不安にならないよう、教師は、「子どもの力を信じ、子どもが主体的に学べる環境を整えること」が大切だと思う。例えば、今回私たちが実際に調査研究を始める準備や話合いの段階でテーマを決める際に「環境・情報・国際理解・少子高齢化・ふるさと教育」など様々な視点からのキーワードが並べられ、思考が広がりやすかった。その広がった思考を生徒が自由に自分や相手の意見が目で見えてわかるように、メモ用紙やホワイトボードなど、こういう細かい生徒への配慮が「自分や相手の意見を自由に引き出せる」主体的に学べる環境に繋がる事を私自身が実感し、効果を十分に得られた。教師がすべき第一歩だと思う。(中略)「生きる力」を育成していくのは学校だけでなく、地域や家庭など縦と横の連携、協働、そして生徒自身だと思う。そして生徒がこれらの資質・能力を身に付け、自分を信じ、生きていくことが出来るように「総合的な学習の時間」で学んでほしいと考える。

<学生C>

・・・今回私たちが行った調査活動は、インタビュー調査と電話での聞き取り調査でした。まず計画を立てる段階では、ここまで深く調べることができる事など考えていませんでしたが、思い切った行動が大事なのではないかと思い、インタビューや聞き取り調査を行いました。そのおかげで多くの方から答えを頂くことができ、成果は大きいものでした。

生徒たちには、自ら考え行動する力が少し足りないと感じます。これは能力の面で大きく成長できるチャンスです。仲間と協働し、創り上げていくプロセスの中から生徒一人一人が何を得るかは様々で、その感じ方が違うことも学習の成果になり、その生徒の資質も高めることになると考えます。「総合的な学習の時間」によって、生徒には、「自ら考え、行動し、地域社会を通して、仲間と協働する」資質や能力を身に付けてもらう必要があると感じました。

<学生D>

・・・(中略) 実際に私たちも調査研究を行って、自分たちで様々な分野の中から一つの課題を探し、調査計画を立てて、インタビューや資料集めをして、報告書にまとめて発表会という流れで取り組んできた。私たちのグループは、「国際化・情報化」をテーマにして、沖縄で起こっている国際化から見て、情報化がどういう関連をして影響しているのかと課題をみつけることができ、これは英語や社会の資料とも結びつくことができるため、教科横断的であり、実社会で起こっている課題を多面的・多角的にとらえることができた。そして、グループでどういう流れで調査を行っていくのかを考えて、プランニングすることによって先を見据えた計画ができ、行動に移すことができるため、計画性を養うこともできた。実際に「国際通り」でインタビュー調査をして、地元の人や外国人観光客の人と話をして、世の中とのつながり、また自分たちと地域など互恵的な相互作用を実感するこ

とができた。そしてこの一連の探究を通して、「主体的・協働的な探究」をすることができ、「最適解」も自ら考えだすことができた。「総合的な学習の時間」では、チームで「最適解」を構築していき、学び合う活動に参加・貢献する資質・能力の育成が目指され、同時に「協働」がないと成り立たない。グループでの「探究」がそれを育み、更にテーマ発表会や中間発表会を設定することで自分たちも相手も見直し、主体的・創造的に取り組むことができると考える。

<脚注>

- 1) 森田真樹/篠原正典 『総合的な学習の時間』 2018年 ミネルヴァ書房 P.1
 この中で、「・・・この導入に大きな影響を与えた1996(平成8)年の第15次中央教育審議会における『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』の答申内容をみると、導入の経緯がわかる。」と示している。
- 2) 平成15年に行われた一部改正について、田村は「平成14年の本格実施以降、総合的な学習の時間の成果は一部で確認されてきたものの、実施にあたっての難しさも指摘されてきた」と改正の必要性を述べている。
 田村学『リニューアル総合的な学習の時間』北大路書房 2009年 P.16
- 3) 平成20年1月の中央教育審議会初等中等分科会教育課程部会で指摘された課題として以下の点が記述されている(同上, P.16~ P.17).
 ○総合的な学習の時間の実施状況を見ると、大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。また小学校と中学校とで同様の学習活動を行うなど、学校種間の取組の重複が見られること。
 ○こうした状況を改善するため、総合的な学習の時間のねらいを明確化すると

ともに、子どもたちに育てたい力（身に付けさせたい力）や学習活動の示し方について検討する必要があること。

○総合的な学習の時間においては、補充学習のような専ら特定の教科の知識・技能の習得を図る教育が行われたり、運動会の準備などと混同された実践が行われたりしている例もみられる。そこで、関連する教科内容との関係、中学校の選択教科との関係の整理、特別活動との関係の整理を行う必要があること。

4) 田村は、探究的な学習となることの明確化について、以下のように記している。

「・・・基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は、教科で行うことを前提に、体験的な学習に配慮しつつ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動となるよう充実を図ることとしている。総合的な学習の時間と各教科等との役割分担を明らかにし、総合的な学習の時間では探究的な学習としての充実を目指している。」
(同上、P.19)

5) 田村は、例示する視点として、以下のように示している。(同上、P.20)

「学修方法に関する事」、「自分自身に関すること」、「他者や社会とのかかわりに関すること」のそれぞれの視点から、考えられる育てたい力の例としては、次のようなものが考えられる。

- | |
|--|
| <p>○学習方法に関すること：情報を収集し分析する力、わかりやすくまとめ表現する力など</p> <p>○自分自身に関すること：自らの行為について意思決定する力、自らの生活の在り方を考える力など</p> <p>○他者や社会とのかかわりに関すること：他者と協同して課題を解決する力、課題の解決に向けて社会活動にする態度など。</p> |
|--|

6) 田村は、「・・・例えば互いに教え合い学び合う活動や地域のひととの意見交換など、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視する。それに加えて、言語活動により分析し、まとめ・表現する学習活動を重視することとした。・・・」
(同上、P.21)

7) 学生による課題設定は、「国際理解、情報、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題、及び職業や自己の将来に関する学習活動」の中から選択し、グループでの課題追究活動を行っていく。

8) コアカリキュラム (core curriculum) とは、「教育課程全体のうちの、中心となる課程、または、中心課程を核として組織統一された教育課程の全体。なお、教職課程コアカリキュラムの活用については、「・・・教育課程の質保証や教員の資質能力の向上のためには、教員を養成する大学、教育を採用・研修する教育委員会や学校法人、教育制度を所管する文部科学省等の各関係者認識を共有して取組を進める必要がある。・・・」(教育課程コアカリキュラム 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 平成29年11月)

9) 沖縄の方言を「うちなーぐち」(沖縄語) と言い、「あいうえお」が「あいういう」と発音されるのが基本。同じ言葉でも、沖縄本島と石垣島、宮古島ではまったく異なり、実は、本島でも、南部、那覇、首里、中部、北部とエリアによっても違う。(たびらい「沖縄観光情報」引用)

10) 方言札について、梶村光郎は「・・・罰の内容も方言札を手渡されるだけで済む場合と、札を首に掲げられる場合があり、それに加えて立たされたり、掃除当番をさせられたり、修身の点を下げられたりするなどの罰がることが確認された。・・・」梶村光郎「沖縄における方

言札の出現に関する研究」 沖縄大学地域研究所 2019年4月

- 11) エイサーは、ウィキペディアによると「沖縄県と鹿児島県奄美群島でお盆の時期に踊られる伝統芸能」とあり、「・・・祖先の霊を送迎するため、若者たちが歌と囃子に合わせ、踊りながら地区の道を練り歩く。また、かつては祝儀を集めて集落や青年会の活動資金とする機能も重視され、そのた金でため池を設けた例もある。地域によってはヤイサー、エンサー、七月舞、念仏廻りと呼ばれる。
- 12) 2020年及び2021は、コロナ禍のため、地域でのエイサーはほとんどが中止になっている。しかし、コロナ禍が終息した後に地域でのエイサーの活動がスタートできるよう各青年会を中心に準備が行われている。